

ベネチア大学日本語学科、基調講義概要

## 西洋圏における日本語文化研究

マリオ・マレガ師の文庫足跡をたずねて

駒澤大学駒澤短期大学国文科教授

大阪臨南寺東洋文化研究所研究員

武庫川女子大学関西文化研究所協力員

萩原 義雄

### はじめに...マレガ文庫の調査と私(自己紹介)

マレガ文庫の調査は1999年から日本の国文学資料館の研究員スタッフを中心に実施され、その報告と概要を兼ねてこの調査の責任者であったローバト・キャンベル氏が日本大学百周年記念において基調講演をなされたことでその全容を確認しました。そして、マレガ師が日本の『古事記』をイタリア語訳していることに注目視し、彼の遺した文庫資料を訪れ、その内容を見極める最も大きな動機づけとなった幸いです。(この調査者のなかに、こちらのラウラ先生がご参加されていました。これがご縁です)

今日、お出での方々を前にお話しする私の名前は「ハギハラ ヨシオ」と云います。日本人の名前の多くは、自然景物に由来するものでございます。私の名字は、「萩」、「秋の艸」と「原」ですから「秋に花咲く、萩の草原」という意味でございます。この草花が「萩」です。「ハギノハラ」すなわち、「ハギハラ」でございます。覚えていただけましたでしょうか。



## 似ている「マレガ」と「マンガ」の文字

片仮名で表記しますと、二字めの「レ」と「ン」の表記はよく似ていますので、瞬時に見ると「マレガ文庫」は「マンガ文庫」のように思えてしまうことがございます。このマレガ師の文庫には、近年ヨーロッパ圏の日本研究として多くの方々に注目されている日本の「マンガ」資料は残念ながらございません。ですが、「マンガ」の原点ともいえるたくさんの絵画資料が保存されております。このことについては、今話すのではなく、後半部にお話ししたいと思っております。文字もそうですが、日本のことわざに「似たもの同士」という表現がございます。そこには何か結び合わせるものがあるのかもしれませんが。文字は会話のことばとは違い、長い歴史のなかで見ぬいにしえ人から未来の人へと伝えられてきました。その保存する対象物も、金や石に刻む、土器に書く。竹や木に書く、そして紙に書きます。現代では電子媒体に記録することにまで及びました。この文字の歴史こそ人類の世界遺産に匹敵します。私は東洋の文字である漢字資料を中心に研究して来ています。日本の文字の一つである片仮名は、漢字の一部を省略して構成されています。「マ」は「万」、「レ」は「礼」、「ン」は「无」、「ガ」は「賀」ということです。こうした文字は慣れればすぐに読めるものでしょう。ですが、時に読めない文字に出会うことがございます。その一部が欠落したものの、これを読むことは字そのものを知らねばなりません。また、「まじない」文字は、読むと云うより意味を理解するというものもございます。そうしたなかで、近年日本の土中から発見された文字群のなかに東洋文字とは明らかに異なる西洋の文字が記されていることに気付かされたのです。その文字は誰がどのような目的で書き残したのか。一文字ですから、その意味合いを理解するにはほど遠いものがございます。ですが今日、そうした文字が出土しています。実は、日本だけではなく隣国韓国からもこうした文字群が出始めています。その研究は奈良文化財研究所というところを中心に今も少しずつ解読作業が進められています。今、この場で皆様方にそうした資料をお見せできないことですが、記憶の断片に留めておいてください。まだ、結論は出せませぬが、トルコやローマに由来する文字かと見比べて見る楽しみがございます。



### マレガ文庫の資料その一

ところで、マレガ師は日本に滞在すること四十五年間、こうした年月のなかで何を求めていたのでしょうか。その断片をここに一つ繙いて見たいと思うのです。マレガ師は日本の権威ある東方学会で四度のご発表をなされております。その最たるものとして、「<sup>キリスト</sup>仏教と景教」の日本伝来に焦点を絞られたこと、これは容易ならぬものでございました。私たち日本人ですら「<sup>キリスト</sup>景教」は1594年に宣教師フラシスコ・シャビエルがもたらしたものと信じておりました。ですが、仏教の伝来と同じくして渡来したものと考えておられたようです。日本の西暦600年代、この時代にです。この時代を代表する人物として「<sup>Sciotoku Taisci</sup>聖徳太子」(572-622)様がおります。日本の昭和年代の一〇〇〇円紙幣にその尊像が刷られていました。二セ札がはびこり、今では使われていないものです。この「聖徳太子」様の資料を蒐集なされ、さらにそのゆかりの地、大和「法隆

寺」、そして京都太秦「廣隆寺<sup>\*1</sup>」(大酒神社<sup>\*2</sup>)に関する資料をこの文庫に遺されています。ここで、紹介したいのは「聖徳太子傳」という江戸時代後期資料が主たるマレガ文庫にあっては、めずらしく古い版刷りの資料です。寛文六(1666)年の資料です。この資料は、日本にも同じものが数種あって知られていますが、それを繙いて読まなければ何も見えて来ません。このなかに「甲斐の黒駒伝説」というものがあり、内容は荒唐無稽なフィクションめいてたものとなっています。太子はこの黒き神馬を得て、これに乗り七日七夜、飛行自在(空を飛ぶ)に日本国を巡見しました。太子のおられた大和(現在の奈良県)からもっとも遠い地である、東北地方の「秋田城壺の碑」に一夜宿泊されたというものです。近年、東北官衙の遺跡の数々が発掘され、日本では話題をあつめています。こうした最北の地を訪ねたとすることは事実ではないにせよ、その伝記に記録することは大いに注目せねばなりません。太子にゆかりのある人々が情報収集に関わっているからです。「小野妹子」は太子の口にされたことを『未来記』という名の書物に遺されました。この一節に「我入滅乃後、一百年を過て、人王四十五代の国王と生て彼轉法輪の光明の所に大なる佛をつくり、大伽藍を作らん」とあって、これは聖武天皇のことで、奈良東大寺の大佛を建立したことで知られております。近代まで、日本の東北地方は、辺鄙な地としか受け止められていませんでした。このように隠され続けたが故に神秘的なものが幾つも点在するのでしょうか。その一つに「壺の碑」が知られていたに過ぎません。話はそれるかのように、この東北の青森県十和田湖に近い地「戸来」には、「キリストの墓」が現存するのです。この地を代々受け継ぐ沢口家の家紋は「ダビデの星」、そして、何よりも青森県南と岩手県北地方の盆踊り歌として謡われ続けている「[ナニヤドヤラ](#)」なのです。その歌詞は、「[ナニヤードヤレー](#) [ナニヤドナサレデア](#) [ナニヤドヤラヨー](#)」という意味不明なのですが、これをヘブライ語として訳しますと、「聖前に主を讃えよ、聖前に主は逆賊を掃討したまえり、聖前に主を讃えよ」。つまり、「神のもとに、自分の軍は敵をやっつけたのだ。自分たちの大将を誉め称えよう」という意味になります。大陸渤海の国との海ルート交易もしいて見えてきています。こうした地を聖徳太子が巡見すること自体、利を得るものがあったものと考えてよいのではないのでしょうか。日本における最初の「黄金の発掘」は、この東北の岩手県でした。この地に今も営む金氏は、現当主だけが入許できる藏を持ち、この時代にあってもその寶物は未公開にあります。この奥州の金塊は、都奈良に献上されたのみでなく、西暦八〇〇年頃から一四〇〇年に亘る長い年月、北方ルートを通じて大陸にもたらされていきました。この金の採掘技術

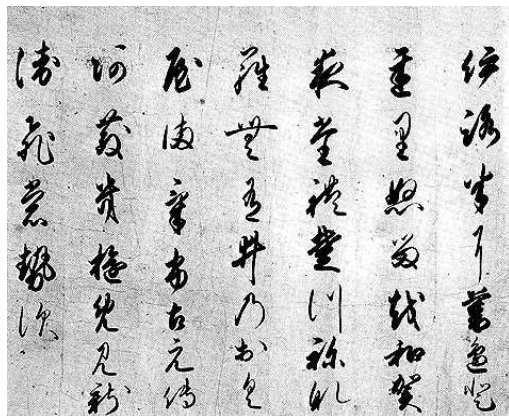


\*1 広隆寺にある弥勒菩薩像の「弥勒」が、インドの「マイトレーヤ」に由来し、それはヘブライ語でいう「メシア」であるという。その太秦さえ、「イシュ・マシア」あるいは「イエス・メシア」の音であろうともいう。その他、秦氏にまつわる京都の地名の中に、同様にキリスト教に関係する名称をいくつも見いだすくは、京都を知る者には実に面白い。なお、秦氏から流れ出た姓として、秦、畑、羽田が知られる。」

\*2 「大辟神社」=「大關」は、「ダビデ」の漢訳語。10月12日「牛祭り」に「摩多羅神」が黒牛にのり四の赤鬼・青鬼と登場し、祭文を唱える。小説家(前産経新聞京都宗教部担当記者)司馬遼太郎は、兵庫県赤穂市の同名神社を取材し、小説『兜率天の巡礼』に「秦氏は一三世紀世界的に絶滅したネストリウス派の景教徒」として引く。笙演奏で知られる東儀家は秦末裔にて秀樹は川勝の命日でもある上記祭日に誕生している。



そのものは、この頃の日本人では到底考えられないものだったのです。このベネチアから出発した一人の若者マルコポーロが晩年牢獄で口述した『東方見聞録』こそ黄金の国「日本」を西洋に広める原点となったこと言い得て不思議な限りでございます。その日本の「黄金」に関わ



ることばとして黄金がもたらされたその地「飛鳥」<sup>あすか</sup>という響きのことばがございます。この「ASUKA」「ASCA」「ASHOCA」「ASHOKA」という名は世界を周圈すると環状のように繋がるのではないかと私は思っております。また、日本に古く伝わる「いろはうた」四十七文字は、七行七文字で表記されています。この韻尾語には「とがなくてしす」、そして、頭冠の語に「いちよらやあゑ」という文言が隠されています。「ヘライ」そして、「イチョラヤアエ」<sup>イエフダ</sup>なのです。他に「八幡 (Yapadaa Yahada)」は、「Yehudha(ユダヤ)」<sup>イエフダ</sup>。そして、マレガ師は、一体どこまでこの視野で日本に於ける景教<sup>\*3</sup>について追い込んでいたのでありましょ

うか？

こうした日本の歴史文化の事情を思うとき、都会「TOKYO」だけではなく、田舎「NIHON」を若いあなた方一人一人の実際の眼を持って見てもらいたいのです。それは、キリスト教の信者としてではなく、あくまでも祖先からの信仰として永遠に受け継いできたその民の姿としてです。

## マレガ文庫の資料その二

次に、現代の都会「TOKYO」から世界に発信続ける文化の一つ「マンガ」ではなく「マンガ」についてお話しして見たいと思います。でも「マレガ」なのです。最初にマレガ文庫には「マンガ」はありませんと申しおきしましたが、その「マンガ」の原点ともいえる「鳥羽絵(TOBABWE)」がここにあるのです。「鳥羽絵」とは、「鳥羽僧正覚獣」

(1053-1114)が製作した国宝『鳥獣戯画』(白描画...猿・菟・蛙など擬人化



\*3 明治時代に、東京文理科大学教授佐伯好郎博士は、「秦氏は、キリスト教徒であった」と唱えていること。『失われた原始キリスト教徒「秦氏」の謎』《飛鳥昭雄・三神たける》に「元糺の池」とエルサレム「バプテスマ(洗礼)をなす「シロアムの池」の類似」が指摘されている。

してその遊戯のさまを描く)に依據する呼び名です。この複製本をマレガ師も所有なされておりました。いわばマンガの元祖というものです。ことばの「吹き出し」は、まだ「風船」にはなっていないことばも書かれておりません。そして、さらに滑稽画・錦絵・浮世絵などの収集の資料がマレガ師のも一つ、別な眼<sup>まなざし</sup>でなされております。

今年ヨーロッパで、「MANGAマンガ」(TASHEN 2004 刊)という書物が発刊され、このイタリアでも購入ができました。これを見てもと総勢135名の日本の漫画家とその漫画を取り上げ、この内容をダイジェクトにまとめていることがよくわかりました。



ところがです、一人落ちているのです。「サザエさん」という漫画をご存じでしょうか。私の大学のある世田谷桜新町というところに住んで居られた長谷川町子さんの代表作です。アニメ番組としても昭和四十四年東芝日曜劇場として四十年といった長寿な番組にもなっております。映画も製作されています。女優江ザエさんを演じています。勤める大学にも聴講生としてお出でになっておりました。この「サザエさん」が何故でしょうか、抜けているのです。この本の編者に確認して見たい感もあります。著作権問題なのかもしれません。この「サザエさん」が各地を旅行する。その画面を観た人が大勢その場所に観光客としてやってくるという観光経済構造図式が生まれていきました。



©長谷川町子美術館



利ちえみさんが初代「サザエさん」の長谷川さんは私のお出でになっておりました。この「サザエさん」が何故でしょうか、抜けているのです。この本の編者に確認して見たい感もあります。著作権問題なのかもしれません。この「サザエさん」が各地を旅行する。その画面を観た人が大勢その場所に観光客としてやってくるという観光経済構造図式が生まれていきました。

昨年、日本で私は、手塚治虫さんのマンガを中心に講義を行いました。その内容はすべてHP上に日本語版でしか紹介していませんが掲載しております。



一つだけ、今日お話ししますに、左の図絵は、『虹のプレリュード』という作品です。この作品は、手塚治虫さんが晩年、再度彩色画にして同じ作品を書き直したものです。最初に書かれた黒白のものと比較してみると、その筆遣いと彼の細やかなこだわりの箇所がうかがい知れるものでございます。

「百聞は一見にしかず」、ご自分でその箇所を捜してみたい楽しみを私がそいでなりませんから、深くは絵解きをしないでおきましょう。

また、さいとうたかをさんの描いた劇画の一枚は、絵画そのものでございます。



いまや、携帯電話でマンガの素描に近い遊戯として「絵文字」が日本では結構もてはやされています。絵文字は、文字をモチーフにして一枚の図絵に仕上げて行きます。このような具合にです。

@ 牛 (Nov.5.'98)

---

A\_A  
γ ▼ フ  
。 。 、  
(.. )ノ

これもマレガ文庫に、江戸後期の絵文字の文献が所蔵されています。このような資料を見つめ直すことにより、こうした現代に至るまでの時代の運びそのものを読み取ることができるのです。その根源ともなるマレガ文庫の資料をどう活かすかは、これからのあなた方に許され、委ねられた特権だと私は考えています。幸いにもサレジオ大学マリオ・マレガ文庫は開かれた図書館であり、現図書館長のフォワン・ピッカ師、そして、今日、私の日本語の通訳をいただきましたラウラ・モレッティ先生には、大いなる感謝の気持ちと讃辞をお送りし、これからのマレガ文庫の活用がさらに西欧と日本とを強く結んでいく文化遺産として大いに進展する足がかりとなればと願うものでございます。これを持ちまして、私の話を終わりとさせていただきます。どうもありがとうございます！

《補注》 「イチヨラヤアエ」(「Israelite」「yisrael」神が統べたまわんことを 聖書)

### 失われた十族

The Lost Ten Tribes 最初のイスラエル王国はソロモン王の死後に南北に分裂したが、北王国はアッシリアに滅ぼされ、少し遅れて南王国はバビロニアに滅ぼされた。(バビロン補囚)その後、南王国の人々は帰還したが北王国の人々は今も行方不明である。彼らの末裔を探している「アミシャブ」などの組織もある。日本人がこの十族の一つだと主張している人々もいる。(旧約聖書続編のラテン語エズラ記13章にも関連記述がある。)

### 秋田城壺の碑

「壺の碑」は、陸前(宮城県)多賀城址、陸奥(青森県)、上野(群馬県吉井町)多胡碑が知られている。「多胡碑」(711年)には「羊」の文字が刻まれ、此地は推古朝紀元599年の『日本書紀』に依れば、百濟国から初めて羊が献上され、日本で最初に羊を飼育した地と云われている。太子傳では、秋田城としていることからして未見の「壺の碑」がある可能性も捨てきれない。

日本初の金の採掘場については、遺跡がある[涌谷町](#)の[黄金山神社](#)だと思われます。それが当神社にも祀られ

ているのは、当時、すでに航路の標識、航海の神として頼られ、陸奥山の名で知られていた当島が陸奥の金発見の象徴とされたためでしょう。良弁の出自は近江と相模の2説ですが、相模漆部というのが強いと思っ  
てます。金鷲衆ですし大仏鍍金の陸奥の金もおそらくからんでいるでしょう。気仙郡における金一族

## マレガ師の『古事記』論は、『旧約聖書』へとつながる

ヨセフ・アイデルバーグ『大和民族はユダヤ人だった』

イサクの子ヤコブ(Jacob = 踵を掴む者)「姉(レア)妹(ラケル)の結婚」は、ラケルに戀し、彼女たちの父は  
目の弱い姉レアを共に嫁したいと願うが、ヤコブは此を嫌う。〔創世記 29 章:15 ~ 30〕と、<sup>ニギノミコト</sup>邇邇藝命は  
<sup>オホヤマツミノカミ</sup>大山津見神の娘、<sup>コノハナサクヤヒメ</sup>木花佐久夜姫に求婚するが、父は、その姉<sup>イハナガヒメ</sup>岩長比賣を共に嫁してくるが、醜い姉を戻して  
しまう。〔上巻〕

ヤコブとラケルの子ヨセフは腹違いの兄たちにいじめられ、エジプトに奴隷として売られる。だが、ヨセ  
フは、この地で宰相となり、兄たちが凶作で苦しんでエジプトに来たとき、彼等を助け、その罪を許した。  
<sup>コノハナサクヤヒメ</sup>邇邇藝命と<sup>ヤマサチヒコ</sup>木花佐久夜姫の子<sup>ウミサチヒコ</sup>山幸彦は兄<sup>ウミサチヒコ</sup>海幸彦にいじめられ、海神国に行き、龍女と結ばれて干満珠を持  
ち帰り、凶作に苦しむ兄<sup>ウミサチヒコ</sup>海幸彦にその神力を示し、やがて兄の罪を許す。〔上巻〕

ダビデ王の軍隊は、エドムのシア山にて戦う〔サムエル記 08.14〕。崇神天皇の軍と<sup>たけはにやすのみこ</sup>建波邇安王の軍が、  
山城の<sup>わからがハ</sup>和訶羅河を挟んで相挑む。そのことから、「<sup>いどみ</sup>伊杼美」と云い、今「<sup>いづみ</sup>伊豆美」と云う。〔中巻〕

「とばゑ【鳥羽絵】」 鳥羽絵は江戸時代中期に大坂で流行った滑稽な絵である。手足が異様に細長く、目  
は黒丸か「一」文字に簡略化され鼻も低く大きな口を持ち、誇張と動きがある。この誇張と動きは、現代の  
漫画にも通じるものがあり鳥羽絵はその後、北尾政美の『略画式』や葛飾北斎の『北斎漫画』などを経てG  
ビゴ - の時局風刺雑誌『トバエ』やポンチ絵へと続いて行く。「トバエ」という言葉が「漫画」を意味する  
言葉として大正期まで使われていたことからその影響力の大きさが窺える。

鳥羽絵は版本の形で大坂から瞬く間に全国に広がっていった。描かれるテ - マが主として庶民の生活に向  
けられていたため、庶民は受け入れやすく軽妙で面白おかしい描写に笑い転げたのではないだろうか。世界  
に類を見ないといわれる「マンガ」文化を持つ日本だ が、案外こんな頃から培われて来たのではないかと  
思える。

1 1 月 3 日が誕生日、二人の漫画家





イタリア半島・リベリア半島、そして**プロバンス地方**は、古はオーク(柏)の森が繁茂していたところです。フレデリック・バック監督の『[木を植えた男](#)』(1987年 原作は仏人)はそのオーク(柏)の森を回復する話でした。人生の楽しみ方を実に心得た人たちが今も生活する。フランスでも北



半分、緑の滴っているところほど、自殺者が多い。人間に役立つものしか生えていないところでは自殺者も少ない。こちらの方が云われているとのこと、いかがなものなのでしょうか。日本の東京、明治神宮(大正四年起工、九年竣成)は、明治天皇の御陵ですが、大隈重信さんは、日光のように杉を植えようとした。でも植物学者は、関東地方には馴染まない



と反対し、今の照葉樹林の森となっています。人の手の入っていない森は下草が生えません、ですから歩きやすい。とはいえ、深い森ですので怖いところでもあり、反面、神の宿る清浄なる地でもありました。そこを人が使いやすくしていった。木の生え方、水の澄み方、鳥の飛び方です。日本が世界に誇れる遺産はと、訊かれたら「森」そして「水」、もっとも深く、美しいところと応えたい。万物霊長の国と申しあげたいのです。この美しい日本をひとりの眼で、一人の心で見て感じて欲しいのです。人間生存の本質には残酷な生命の殺戮といった部分がいつもつきまっています。文化とか文明というのは、こうした多くの犠牲の上に成り立っています。人間の集団・集合した地帯は、ストレスが溢れています。このストレスを発散するのが街(都)のカーニバル(祭り=けが人・死者がでます)でもあります。京都は、一年中お祭りだらけです。なぜって、ストレスを発散することで、尤も礼儀正しい人間になれるからなのでしょう。